戦争の悲しみをバイリンガルで語り続ける人

結城文第三詩集『花鎮め歌』に寄せて

鈴木比佐雄

1

結城文さんの詩や短歌には、幼くして戦争で父を亡くした子の透き通るような悲しみが根底に流れている。決して二度と会うことない面影だけの父の愛を辿りながら、父の命を奪った国と国の諍いのない世の中を作るために、詩や短歌とそれらの英語翻訳を通して国境を越えた友愛の可能性を実践してきたのだろう。結城さんの父への鎮魂は、父にとどまらずに戦争の悲劇で亡くなっていった多くの民衆の思いと重なっている。

結城さんは一九三四年に東京都の高円寺に生まれたが、結城さんの本名は千葉節子で、結城文はペンネームだ。疎開で茨城県結城市周辺の利根川近くに親子七人で暮らしていたこともあり、その時の関東平野を流れる利根川の水辺の記憶を大切にしていて、結城の地名をペンネームにしたのかも知れない。結城さんの詩篇に流れるリズムは、きっと利根川の水音や川原の風の音などに影響を与えられているのだろう。新詩集に収録されている詩「利根の川音」はその意味で結城さんの原風景が住み着いてしまった音風景だろう。結城さんの今までの文学活動を振り返ってみる上で、短歌との出会いが大きいことがわかる。今まで日本語短歌集を七冊、英語短歌集を二冊、アンナ・ホーリーと共著である日英短歌集を二冊、また日本人の歌集の英文翻訳書、英語短歌を創作する英米歌人の翻訳書なども数多く発行してきた。私が読んだのは、第五歌集『光る手』、第六歌集『八月十五日の雨』、第七歌集『新しき命を得たり』だけだが、その短歌の中で特に心に刻まれたものを

引用してみる。

虚空とふ大いなるドーム頭の上つねいただきて
人はさびしき

つれづれの歩みに白く赤く浮きおいらん草に夕
闇深し

おのづから光となりつつ溶けてゆく蠟燭の火を
見つめてをりぬ

生きるとは愛することと思ふとき雲よりにはか
に斜光さし来つ

茜雲の下幾万の妻たちが魚の血流しゐるにやあ
らむ

父よ父　うつしみの父の顕ち来ねば仰ぐ天窓の
向かうの深さ

われの住むこの惑星を吹きめぐり風は生絹（すずし）のや
う荒莚（あらむしろ）のやう

（『光る手』より）

結城さんと話した際に、なぜ短歌を始めたのかと私は尋ねたことがある。すると結城さんは夫の仕事の関係でアメリカに五年ほど暮らしたことがあった。その時に日本の文化や伝統について質問されることが多かったそうだ。帰国後、日本語の伝統を意識し短歌を始めたそうだ。英語はリズム感のある言葉だが、方言を除くと標準語の日本語は一般的に平板でリズム感が乏しい言葉だ。結城さんは大学で英語を専攻し卒業後に高校の英語教師をしていたこともあり、英語のリズム感に匹敵

するリズム感のある言葉として、短歌という定型詩のリズム感のある言葉に親近感を持っていったのかも知れない。引用した詩を少し鑑賞してみる。私たちの頭上は「虚空」に覆われている。人びとが歩く行く手には赤や白の花が咲いているが、「夕闇深い」のだという認識を抱えている。自分が光であることは、実は命を燃焼し蠟燭のように燃えているのであり、それを見つめている存在であるのだ。「生きることが愛することである」と自覚した時に、見えなかった「斜光」という大切なものが見えてくる。茜空を眺めていると母たち女が生きるために魚を下ろし血まみれになっている姿を感じることができる。父をどんなに焦がれても現実に父はやってこないが、天窓を通して大いなる存在に触れている。地球という惑星に吹く風は、絹糸のようにも、ざらつく筵のようにも感じられて、生きることの根源的な意味を問いかけられている。以上のような七首を読んだだけでも、結城さんの父や母を通してこの世にあることの苦しみ、悲しみ、喜びなどの多様な存在感を感ずることができる。次に歌集『八月十五日の雨』の中にも父の死を含めた戦争の悲劇に触れた作品があるので紹介する。

敵機グラマンに撃ちおとされしか山脈に激突せしか我は問ひつづく

あぢさゐの花雨に濡れ父の機が撃ち落とされしその日近づく

夏の日の原爆資料館出でしとき黒太陽にかつと焼かれき

直立の兵ひしひしと杉山に降る八月十五日の雨

言葉は音言葉は記号詩は記憶オリオン星座の光降りくる

詩は意味よりも響きぞとT・Sエリオットいへり　短歌にもかよふ

四十二で死にたる父に晩年のなきこと思ふ戦なき世に

原爆館出で茫然たり噴水の飲ませられなかつた水のきらめき

（歌集『八月十五日の雨』より）

一九四五年七月に結城さんの父はアメリカのグラマン機に機銃掃射されて大菩薩峠の山に激突し十名の搭乗員と共に死亡したと言われている。この歌集が二〇一〇年に刊行されたので、六十年以上経ってこのような表現が可能になったのだろう。父の死の衝撃とその悲劇の意味をどのように考えていったらいいかを結城さんは、生きている限り自問し続けていることが分かる。その戦争責任への問い掛けの誠実さがこの短歌の根底に流れている。また詩的表現における言語思想へ問いかけも、実作を通して語っている。「言葉は音言葉は記号詩は記憶」という表現は、言語のシニフィアン（聴覚映像、意味するもの）とシニフィエ（概念、意味されるもの）が結合されて、詩という詩人個人の記憶から発した言葉が、実は人類の記憶であり、さらにオリオン星座の光のような聖なるものを含んだ宇宙の記憶まで汲み上げることが出来るのではないかと語っているように私は感じられた。また結城さんは、父の死だけでなく、広島・長崎で被爆死したり、その放射能で苦しんできた人び

との苦悩を決して忘却してはならないという強固な使命感を抱いていると思われる。

二〇〇七年八月六日の奥付で『原爆詩一八一人集』の日本語版は刊行された。その英語版『*Against Nuclear Weapons - A Collection of Poems by 181Poets 1945-2007*』は、日本語版の編集が確定した夏から開始されて一二月中旬には刊行された。東洋大学名誉教授の郡山直さんを中心とする翻訳者の四名の中で、三分の一の六十篇ほどの翻訳をしてくれたのが、結城文さんだった。そして最後の最後まで翻訳の修正を続けて、コールサック社まで何度も出向いてくれてベストを尽くして最終校正してくれたのだった。その時には、歌集はまだ読んでいなかったので、父上を戦争末期に亡くされた方だというのは、後から知ることになった。なぜあれほど原爆詩集の英訳に力を注いでくれるのか、当時は気付かなかったが、これらの短歌を読めば、結城さんの平和を願う思いがいかに強いかが今になってよけいに伝わってくる。

2

結城さんは英語短歌において、貴重な先駆的な活動をしていたことが、アメリカの歌人のアンナ・ホーリー氏との二冊の共著「英語・対詠歌集」から読み取ることが出来た。二〇〇五年に刊行された『*White Flower in the Sky*・空の白い花』の巻末にある結城さんの文章の中に英語短歌についての興味深い理論が記されてある。この考え方は結城さんがアンナ・ホーリー氏との短歌の交換やその翻訳を通して試行錯誤しながら見出していったという。その引用をしてみる。

「短歌のみならず日本の定型詩一般についてにいえることであるが、それを読み上げる時に、

我々は句と句の間に適当な長さの休みを無意識に入れたり、母音を引き延ばしており、そこには知らず知らずのうちに、ある一定の規則が働いているのである。そうした発声されない休止を含め、一音を一マスと考えると、短歌は各句八マスずつの五句から成り立っていることが知られている（表1参照）。そして、アクセントの少ない日本語では、二音ずつまとまって発音されている。つまり、短歌は二音を一拍とする四拍子の五句から成立しているのであり、五音の句では三つの休符、七音の句は一つの休符を入れて読んでいるのである。

上記のように、短歌の調べは常に二音一拍の四拍子で進行する。これを五句、すなわち五回繰り返す短歌は、常に二十拍の内在律をもつと考えられる。人間の音声発音の器官に大差は

表１・短歌の内在律・二音一拍四拍子の五句（○は休止を表す）

	一拍	二拍	三拍	四拍	
初句	yo no	na ka	wa ○	○ ○	（八マス）
二句	tu ne	ni mo	ga mo	na ○	（八マス）
三句	na gi	sa ko	gu ○	○ ○	（八マス）
四句	a ma	no ○	o bu	ne no	（八マス）
結句	tu na	de ○	ka na	si mo	（八マス）

（世の中は常にもがもな渚漕ぐ海士の小舟の綱手かなしも）

ない。そこで、短歌に見合う英語短歌の韻律は二十拍、十の強勢（アクセント）を含む十詩脚（フット・詩を構成する韻律の単位）の英語短歌に他ならないという仮説にたどりついた。

すなわち、短歌は二音一拍四拍子、総拍数二十拍の内在律と五七五七七の定型との二重性のうえに成立しているのであり、これを二十拍／十詩脚の英語短歌に翻訳すれば、語義の上からも韻律の上からも釣り合うという一応の結論を得たのであった。」

私は結城さんの英語短歌創作論に触れて、言語体系が全く異なる言語での詩文学の翻訳の可能性に挑戦している画期的な理論だと思われた。これは短歌の内在律を生み出す精神が、国境を越えた人間観・自然観・宇宙観などを共有しながら、異なる言語で響き合おうとして定型化される詩的精神の交感なのだろう。つまり短歌という日本古来の韻律である「二音一拍四拍子、総拍数二十拍の内在律と五七五七七の定型との二重性のうえに成立」する短歌を「二十拍／十詩脚の英語短歌」に翻訳したり、その逆に英語短歌を日本語短歌に翻訳することが可能なことを結城さんは発見したのだ。そんな二人の英語短歌の実際の作品を紹介してみる。

foolish was I
to become attached
to that star
whose light must be
ever remote from me

Anna

われよりもかくもはるかに光ゐる星に惹かるるは愚かならずや

（日本語短歌は結城文訳）

though we know
the moonlight is only a reflection
tenderly shining
we love to gaze at it
our feelings soothed

Aya

反射のみの光と知れど月かげのやさしくあれば心寄せ仰ぐ

この二首の短歌は、『*White Flower in the Sky*・空の白い花』の最後の作品だった。アンナ・ホーリー氏と結城さんの星や月を眺めて心を慰める時間を大切にするという、人生観・宇宙観・自然観が共有され、魂の交感として響き合っている。その響き合いが英語短歌と日本語短歌の二十拍の調べとして結実されている。アンナ・ホーリー氏が記した英語短歌は、短歌の実作者である結城さんにとって二十拍の韻律を念頭におけば、翻訳は充分可能なのだろう。その英語と日本語の二重の作品から、結城さんは自らの英語と日本語の返歌を作り上げたのだ。次の作品は結城さんの短歌にアンナ・ホーリー氏が応えたものだ。

夏終はる北半球の雨にぬれひまはりの花の首は傾く

wet with rain
in the Northern hemisphere
summer is ending,
sunflowers turn
their necks downward

Aya

On that hill
where young men
killed in war
are buried like seeds
spring flowers bloom
戦死せし若者たちが種子のやう埋められし丘に
春の花ひらく

Anna

結城さんの短歌は、一見すると自然詠のような歌だが、第二次世界大戦中の夏に北半球で父を含めた人びとの首が傾いて死んでいったことを悼んでいるようにも読み取れる。それに応えるようにアンナ・ホーリー氏はアメリカの戦死した若者たちも、種のように故郷に埋葬されている、そんな春の野原に咲いて甦って欲しいと願っている短歌を書き記している。「二音一拍四拍子、総拍数二十拍の内在律」と「二十拍／十詩脚」の相互交感の発見も重要ではあるが、二人の表現者の国境を越えた親和力が必要であり、それがきっと二冊もの日英の連歌集に結実したのだと考えられる。この試みは日本語と英語のリズム・韻律の違いを超えて、共通の基盤や約束事で互いの感受性や考え方などを交換できる可能性を示した優れた理論とその実作だと私は考えている。

3

結城さんは今まで二冊の詩集を刊行している。一冊目は「詩と短歌による組詩集」と記された『できるすべて　All I Can Do』だ。数十行の長詩に短歌が添えられている横書き詩集だ。万葉の時代からの伝統的な長詩と短歌の組み合わせとその英訳という結城さんしかできない実験的な詩集だった。タイトルポエムの最後の二連と短歌の

メッセージ性が率直で心に残るので引用してみる。

生まれたなら　once born,
百パーセントの確率で
with one hundred percentage certainity
死はくるのだから　Death comes;
それまでの　地球の時間を　we will share
分かちましょう　the time on the earth.

受け容れること　to accept you,
かたわらに佇むこと　to stand by you,
わずかを与え　to give a little,
地球の時間を分つこと
to share the time on the earth,
それが私にできるすべて　this is all I can do.

短歌

繭の糸より繊細にわたりをり愛といふ名のひと
すぢの糸
a thread
more delicate than a cocoon's,
an invisible thread
called "Love"
between us

私はこの組詩を読んで、初めてバイリンガル詩人・歌人の創作の秘密に気付いた気がした。英語と日本語が同時に発想されていて、しかも二つの言語が相互に刺激しあい、二つの言語が石で磨かれるような相乗効果をあげる働きが直観的にされているのではないか。「地球の時間を／分かちましょう」というメッセージを伝えるためには、「we will share the time on the earth」という英

語で同時に発信したいと結城さんは考えてしまうのだろう。

結城さんの第二詩集『紙霊』は日本語だけの初めての詩集だ。結城さんは一九九七年に歌人論『葛原妙子　歌への奔情』という七五〇頁（三百頁近くは葛原妙子の評論などの資料の再録も含む）もの評論集を刊行している。その葛原妙子の短歌から「紙霊」という言葉は引用されたものだ。結城さんは葛原妙子から歌人としての生き方を学んできたのだろう。その感謝の意味で短歌の言葉を借用して「紙霊」という詩を冒頭に置いたのだろう。歌人、父母、亡くなった詩人の秋谷豊氏など、結城さんが影響を受けた人びとへの感謝を込めてこの詩集が生まれたのだと思われる。父の悲劇を辿る旅や戦争の悲劇も詩行の展開力を試みて書き得たのだろう。

新詩集の『花鎮め歌』三十八篇は、結城さんにとって三冊目の詩集だ。一章「花鎮め歌」十篇は家族との思い出を書き記した詩篇だが、自らの感受性の原点を読むものに誠実に伝えている詩篇になっている。冒頭の詩は「利根の川音」で、父母と弟と一緒に利根川の川原で蟹取りをした川遊びを想起している。秋の光の中で、蟹を取るために持ち上げた石を父の足親指に落としてしまったが、父は何もなかったように平然としている。利根川の川音の風景の中に遊ぶ家族の肖像が永遠に刻まれているようだ。きっと結城さんの言葉のリズム感に広々とした河原の川音の響きが大きな影響を与えたことだろう。次の「すくず掃き」は、父戦死後の生活の中で弟と一緒に熊手型の掃き箒で、雑木林で落葉を集める詩だ。その落葉でさつま芋の苗床を作ったらしい。結城さんたち子どもが掃く音が、秋の大気の中で透き通るような響きを放っている。「出てゆく舟を」、「包丁の跡」、「ラジオ体操」、「泣かれんよ」、「点滴」、「猶予」、「垂直の幹」、「花鎮め歌」の八篇は、母の介護を慈しんでいる詩間を記したり、母を失った後には母を偲び、母を鎮魂する深い思いが行間から溢れてくる詩篇だ。「花鎮め歌」の最後の二行は「私はうたう魂（たま）鎮めの歌／私はうたう花鎮めの歌」で終わっている。結城さんにとって「花」は、父母の「魂」を鎮めるものであり、きっと自らの詩も母と「空に散った父」に捧げられている「花」のような存在なのだろう。

二章「光の極み」は、広島・長崎の原爆、父の撃墜死など戦争の悲劇を問うた詩篇九篇で、戦争で引裂かれた民衆の痛みは生涯決して消えることがないことを示している。結城さんにとって原爆を語ることは、同時に父を語ることでもあるのだろう。

三章「石を育てる」十一篇は、3・11以後の肉親以外の死者たちを悼む詩篇や、父の故郷への旅を記した詩篇などだ。これらの詩篇は、他者のことでありながら、限りなく結城さんの肉体を通過させて、死者の魂やその場所から汲み上げられたものとの対話を繰り返して言葉が紡ぎ出されているのだ。

四章八篇は、海外旅行で触れ合った場所から、立ち昇ってくる他国の人びとの只ならぬ魂の声のようなものを書き記している。国境を越えていく結城さんの精神のあり方が、多くの他国の他者の声を聴き取ってしまうのだろう。またその詩篇の中に結城さんは自らのメッセージも盛り込んでいる。きっと結城さんは言うべきことを伝えるために短歌だけでなく詩作にエネルギーを注ぎ始めているに違いない。最後に「イエローストーン国立公園　山火事」を引用したい。結城さんの自然観と文明批評的な考えがよく伝わる詩篇だ。利根川

の川音からイエローストーンの山火事の音まで、
バイリンガル詩人・歌人である結城さんの詩篇の
魅力を知ってもらいたいと願っている。

イエローストーン国立公園

山火事

イエローストーン国立公園の三分の一を覆う
山火事の跡の
墓標のような直立の幹
なかには倒れ伏してしまった木もある
一九八八年落雷によって発生した山火事――
自然発生の火事は
住宅や道路に被害を及ぼさないかぎり
あえて人為的に消さないという方針により
五月から十一月まで燃えつづけた

半年近くも燃え続けた山火事を
見つめつづけながら
その自然の終息を待つという息の長さ

しかし　見よ
焼け杭のようなロッジポール松の幹の間に
地上から同じ高さに生えそろった幼木の緑
ロッジポール松の種子はニカワ状の物質に包
　まれ
ある温度まであがらないと殻はやぶれない
山火事の熱で地上に播かれた種子は
胸くらいの丈の
円錐形に生えそろって
日々成長している
高木がなくなり
日照をとりもどした大地には
幼木や下草が繁茂し
山火事を逃れ得た動物たちの餌になった
豊富な餌に
動物たちの数も種類も増した

結城文詩集『花鎮め歌』栞解説文

鈴木比佐雄

コールサック社
2012